

恵まれた女運



伊能忠敬とめぐりあふひと
2 安藤由紀子

「あなたは台所で召使と食事をしない」
伊能家の家付き娘ミチが夫の忠敬に、こう命令したという誤った伝説は、どこから出てきたのだらう。多分、明治以降の伊能忠敬の偉人化の産物であろう。

領主への年始に出府中の夫に出したミチの手紙を、小島一仁先生が紹介している。ライバルだった永沢家が、領主への献上の鱒を飛脚に頼んだのを知り、鴨を送ったからなるべく先を越されぬようにとの内容で、「余計な差出口をきいたとしからないでください」と哀願の繰り返しで終わっている。

御用

ミチは二歳で父を、三歳で後見の伯父を失い、現在の多古町の母

方で育てられた。伊能家は十二年間当主不在であった。佐原に帰

資産形成から地図作り 偉業を支えた4人の妻

御用

ミチは三人の手を得て四十二歳で亡くなった。
その後、内妻に三人の子が生まれたが、母の名は分かっていない。番頭の娘だという説もあるが、証拠はない。

忠敬は寛政二年(一七九〇年)、

快方に向かったたので佐原に帰ったが、また冬に悪化し、これが佐原の見納めになった。
忠敬が江戸店の長女イネにあてた書簡を抄録してみよう。「ノブから『どうしても佐原へ帰る』と言ってきたのでうれしく思いました。しかし帰っても良くなりません。下女たちは『猿松ども』ばかり

平生不自由させがちでした。この辺には良い医者もなく桑原先生の拒指図に任せるしかありません。不自由のないよう心配してやってください」
ノブとの縁はどのようにしてできたのか、いろいろ状況証拠はあるが、まだ突き止められない。ただ、後述するが、ノブの父桑原隆

御用

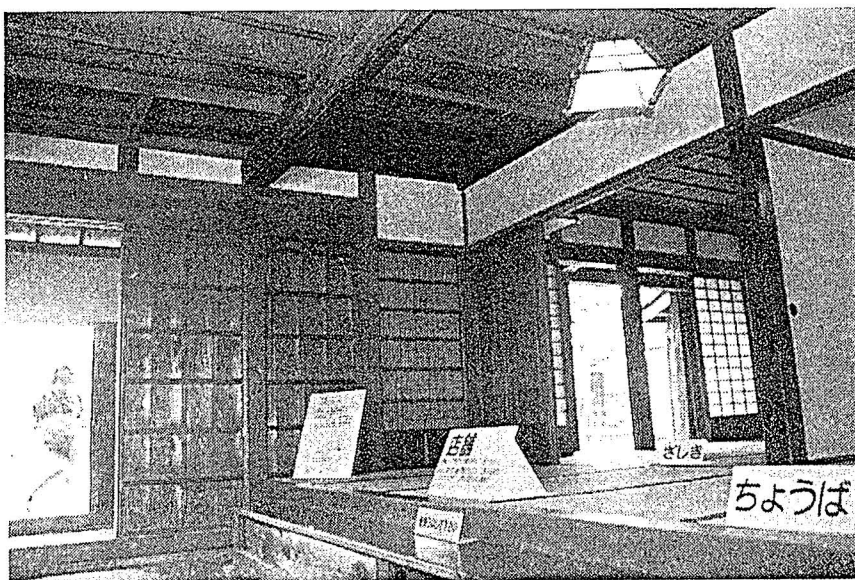
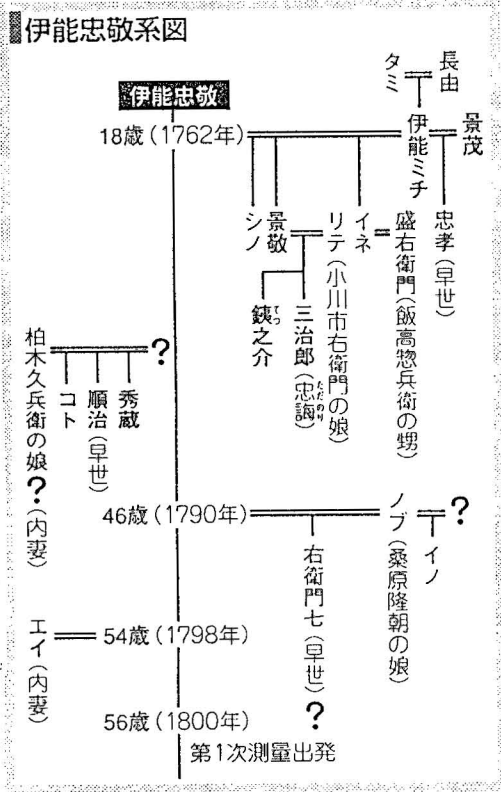
ノブの死後三年たって、エイといる人が内縁としてほんの二、三年の間、忠敬の身辺に現れる。その実在を示す資料が今のところ三点ある。

忠敬隠居後の師で幕府天文方の高橋宗時の書簡に、「伊能はこの節新婦を客分にもらい、昼夜測量に励んでおられます」とあり、二年後に「伊能妻のこと、素晴らしい才女とみえ素説を好み、四書五経の白文を苦もなく読み、算術もでき、絵も上手です。夜限儀(注2)も扱えます。伊能はまったく幸せ者ですね。こんな助太刀がいるのですから。こんどの地図(第一次の蝦夷地図)も、この婦人一人前の仕事をこなしているそうです」と絶賛している。

もう一点は前の手紙の五月月前、忠敬が函館で長男忠敬へ書いたもので、「お茶、秋まで長逗留で、迷惑をかけます」と一言添えてある。エイを佐原の本家が預かっていたらしい。エイは、そのインテリぶりからみて江戸の人だと思ふ。

忠敬はミチによって資産形成の場を、ノブによって地図作りの場を与えられ、わずかの間だがエイにも手伝わってもらった。女運が良かったとしか言いようがない。要するに、忠敬は女性に大変支えられた人だった。

■文中の年齢は数え年



小野川に面した伊能忠敬旧宅の店舗部分。土間と四畳半2室、三畳1室、七畳半1室ある。佐原市で

(注1) 男子が負いても、娘に優秀な婿をとり家を継がせる習慣 (注2) 子午線観測に使った機器。